

変わりつつある“守谷”における 生涯学習とコミュニティとこれから

守谷市 大和田 英 明

私は、昭和 57 年に、当時の守谷町役場に就職し、以来 21 年となる。

昭和 57 年、守谷町においては、全面積の約 7 分の 1 を占める日本住宅公団施行による北守谷団地への入居と民間業者（株三井不動産）施行によるみずき野団地への入居が開始された年であった。前年には、常磐自動車道が開通し、変わりつつある“守谷”を象徴する時期に、私は、行政に携わることになった。

従来の守谷町は、人口約 1 万 2 千人の「平将門」伝説の残る平凡な純農村地帯で、これと云った極立った伝統文化活動はなく、他のまちに自慢出来るものも乏しいまちであった。

然し、都心から 40 キロ圏内であることから、首都圏近郊整備地帯として、宅地開発計画に伴う鉄道建設への期待が寄せられ、昭和 40 年代から、人口の流入が目立ち始め、民間業者による乱開発を防ぐために、昭和 46 年に、当時の日本住宅公団の団地造成計画を決定して以来、整備が進められ、昭和 57 年の北守谷団地への入居に至り、多くの人々が、守谷町に移り住むようになったのである。

昭和 50 年代後半からは、現在以上の人口規模を想定し、行財政需要も増し、毎年のように、学校の建設ラッシュが続き、上、下水道の整備、いわゆるハード面の整備に追われ、ソフト面（教育、福祉、環境等）については、どちらかというと後手後手にまわっていたようである。そのため、生涯学習推進における基盤整備としての公民館や図書館の建設が遅れ、生涯学習に対する理解度は、近隣市町村と比較しても、やや低いように思われる。ちなみに、下水道の整備については、単独事業として、群を抜き、普及率は、90 パーセントを超え、市制を敷くまで、町村の部においては、ずっと全国第 1 位であった。

以上の視点から、“守谷”の移り変わりと私の行政経験と生涯学習とコミュニティとを併せ、考えていきたい。

昭和 57 年に、当時の町人口が、2 万人を超え、平成 8 年まで、年間 1,000 人から 3,000 人規模の増加があり、茨城県内では、牛久、竜ヶ崎と並び、県南地域の人口急増地域として、順調な推移を見せ、その後、社会情勢の変化に伴い、人口の伸びが鈍化したものの、5 万人を超え、平成 14 年 2 月 2 日に、県内 22 番目の市として、念願の「守谷市」の誕生となった。

現在、近隣市町村との合併に対する気運が高まり、会田守谷市長は、10 月の定例記者会見の席上、「まず、隣接する水海道市、伊奈町、谷和原村との先行合併を行い、将来、取手市、藤代町との合併による常総広域圏エリアでの合併が望ましい。」との見解を公表したが、合併に対する市民アンケート調査を実施したところ、早期の合併に反対する声が強く、当面は、合併を見送ることになった。

また、今年 10 月発行の月刊誌「東洋経済」臨時増刊号“地域経済総覧 2004”によると、全国 47 都道府県、839 市区、2503 町村のうちで、人口動態、産業、消費、財政のデータを用いた全都市の成長力において、「守谷市」は、産業指数が 1 位、消費指数が 1 位と、完

全首位になった。小売販売額や乗用車保有台数の増加率が共に、全国1位で、事業者数、従業者数、製造品出荷額、卸売販売額もいずれも10位以内に入るなど、1990年代後半から著しい成長を遂げた。

市内の主要幹線である国道294号線及び常総ふれあい道路沿いには、多くの飲食店が建ち並び、今や、「グルメ街道」と称され、休日ともなると、道路が渋滞し、大きな課題にもなっている。

一方、昭和50年代後半からの“守谷”は、首都圏のベッドタウンとして、転入者の出身地が、北海道から沖縄県と広範囲であり、ブラジル人を筆頭に、外国人も増え始め、生活習慣の違いなど価値観の多様さから、コミュニティづくりが重要な課題であったことは、人口が増え続ける今も変わりはない。

特に、公団施行の北守谷団地については、当初の計画人口が約3万2千人であったために、計画的な町内会等の自治組織づくりや取り決め（例、緑の街づくり協定等）づくりが図られたが、難航し、最近、ようやく、町内会がまとまってきたところもあると聞いている。然しながら、毎夏、恒例となった北守谷連絡協議会主催の2日間にわたる“夏まつり”には、私も数年参加しているが、多彩な催しに、多くの人々が訪れ、地域の連帯感を感じさせるものがある。

また、昨年の全市内の区長会議の席上、「市全体の町内会、自治会の横の緊密なつながりを保ってはどうか。」との一区長の提案により、12月には、守谷市区長会連絡会が発足した。

現在、私が担当している南守谷団地内にある高野公民館の当該区域には、27の町内会、自治会組織があるが、実は、この地域が、守谷市内において、コミュニティづくりが最も遅れている地域で、この11月に区長会連絡会高野支部の設立が、市全体の区長会議において、承認されたそうである。

表面上に感じるところもあるが、コミュニティの基盤づくりが、多少遅れた感じを持つも、高野地域において、行政主導型でなく、市民主導型で、形成されつつあることは、地域の方々の素晴らしい努力の結果であると思う。

地方分権が叫ばれ久しい今日、地域性は、別として、地域の連帯感が生まれて初めて、まちづくりや社会参加は加速されるのであって、“守谷”では、中央公民館が開館し、22年経過したが、地区公民館も含め、多くの右余曲折はあったかと思われるが、「公民館」が、地域のコミュニティ形成の一担を多少なりとも担ってきたのではないかと思うのである。

私が就職当初勤務した守谷町中央公民館は、昭和56年に、町民の方々が、一堂に会し、文化活動や発表会を行う場が欲しいとの多くの町民の方々の熱望により、開館した。当時としては、かなりのデラックスな施設で、建設資金の一部を当時の日本住宅公団より借り入れした、当時は、“守谷”方式と云われた異例なケースであり、総工費約13億円を要した延床面積3,003㎡の県内でも有数の大型公民館であった。

また、当時は、固定席401名収容の音響照明設備の整ったホールが、近隣市町村の方々にとっても、使い易く、地元よりも、県外も含めた近隣市町村の団体に人気があり、よく、利用の申込受付をしたことを記憶している。

その頃、守谷町には、大きく分け、守谷、大野、大井沢、高野の4地区があり、毎年、地区単位に、1町内会を指定し、「地域の課題は、地域全体で考えよう。」の趣旨のもと、

「みんなで行う社会教育の集い」地区集会が行なわれていた。4地区で話し合ったことを毎年12月の全体会議で発表する町大会が、町中央公民館で開催されるようになった。

昭和40年代当初から始まった「みんなで行う社会教育の集い」は、継続され、地域の課題提起の場として、大きな役割を担い、守谷町独自の取り組みとして、30年近く続いたが、今は、「生涯学習推進フェスティバル」と大きく様変わりしてしまっただが、“守谷”の生涯学習とコミュニティーづくりの原点と云えるものであった。

町中央公民館では、昭和57年の大型団地への入居に伴い、首都圏からの転入者と在来の方々との新旧住民の各種の学習会、集会等とおしたコミュニティー形成の場として、活用していただくために、どこの市町村でも、最初、手掛けるように、各種講座、教室の開設をしていった。そして、仲間づくりを促進し、自主グループ、サークルに発展させ、参加者各自が運営を図る手法で、活動を推進してきた。その結果として、現在、中央公民館では、80もの団体が定期使用サークルとして、登録するようになり、伸び悩んだ感も否めないが、当初の目的に対する一定の成果は図れたものとするのが、行政当局の一致した考え方である。

現在、定期使用サークルの大半が、市文化協会に加入し、毎年「ふれあい美術展」、「芸術祭」への参加や、「自主講座」の開催、「生涯学習推進フェスティバル」、「もりやアヤマまつり」等各種行事での実践をとおり、活動の輪を広げ、自立した事業を展開している。

今では、「陶芸」、「絵画」がその中核となり、多くの人材を輩出したようで、公民館のみならず、至るところで、「作品展」が開催されるようになった。

また、今年の市観光協会の事業として、「守谷」の土を活かした陶板を、つくばエクスプレス開業に伴う守谷新駅構内に設置し、市民の未来へのメッセージを刻み込もうという呼びかけがあり、「陶芸」は、“守谷”の文化活動のシンボルとなっているようである。

地区公民館については、平成4年に、みずき野団地内に、8年に、南守谷団地内に、11年に、北守谷団地のはずれに、各々、人口の急増する中央枚通学区を対象区域とした大型団地内に、地域のニーズに沿った形で建設された。現在、各地区館に、専任館長1名、担当職員1名、アルバイト1名の体制で、各地区館の公民館運営協力員の協力を得ながら、運営を図っている。その他在来の地域の小学校敷地内に、守谷、大野の2つの公民館が設置されている。いずれも、30数年前に建設されたので、設備が十分でないが、地域の人々が非常勤館長を務め、公民館運営協力員の自主企画事業により、各年齢層に応じた事業を展開している。

今日までの公民館活動で、共通していることは各種事業への参加が少なくなってきたことと、事業のマンネリ化と参加する顔触れが重なりつつあることで、また、これからの男女共同参画型社会を実現するうえで、地域を創る“リーダー”が不足していることである。先頭に立つ人が見つけにくいことである。この点が、今後の“守谷”の生涯学習の戦略を必要とする部分である。

先にも触れたが、私が就職した昭和57年以降の守谷町は、常磐新線の近い将来への開業に対する期待感に溢れ、人口10万人都市構想がバラ色のように輝き、希望に満ち溢れた時期で、都心のサラリーマンのあいだでは、土地付きの持ち家を「守谷」に求めようとするブランド銘柄にもなり、「守谷ブランド」と称され、「守谷」が、人気を博したこともあった。

然し、平成の当初に、バブルが弾け、土地の需要も減少し、土地価格の下落が生じ、例外なく、この「守谷」も、そのあおりを受け、土地付き一軒家を当地に求める人が少なくなり、人気と共に、人口の流入が低迷し、10万人を想定した将来人口フレームの大幅減少が余儀なくされ、約7万人の人口の見込みとなる予定だ。

当然のことであるが、そうした転入者を見込んだ行政上の財政計画にも陰りが見え始め、公民館や学校を建設するために、公団から借り入れした債務負担行為額も多額で、償還していくには、あと20年もある。また、つくばエクスプレス開業に伴う駅前開発事業についても、市単独事業であるが故、多額な赤字を生み、緊縮財政を図っていかねばならないのも、必然のこととなった。

参考までに平成2年に、東京ドームの約9倍もの敷地面積を有する、当時、国内最大級の広さを持った(株)アサヒビール茨城工場が、守谷町で操業を開始し、傍らの私には、財政基盤が確立し、地元雇用と地域経済の活性化をもたらすものと思ったものだが、ビールの売上げ増に伴う税収は、全て、本社のある東京都墨田区に入るそうで、守谷町には、固定資産税のみが、一般会計に繰り入れされ、あまり、税収面での期待は出来ないらしいことを後で知った。

最近では、(株)明治乳業が立地し、税収面は別とし、市が主催する「夕べのコンサート」や「利根川クリーン作戦」、さらには、国内でも、知名度の高くなった「守谷ハーフマラソン」等の主要行事で、ジュースを提供していただくなど、別の意味で、恩恵を浴している面があり、企業立地に関しての波及効果は生じてきてはいる。

このように、財政事情が懸念されている現在、行財政改革も進み、その第一弾として、今年4月に、行政組織上、生涯学習課と中央公民館が統合され、各公民館には、専任館長のみが、市職員という極めて異例な事態に直面し、また、事業のスクラップアンドビルド及び縮小化が迫られ、来年度予算編成にあたっては、各課一率10パーセントカットの方針も打ち出されている。

私は、以前、公民館講座で、子どもの読書環境整備を目的とした講座「子どもの本のたのしい学校」を住民参加型の実行委員会形式で、企画したことがある。以来、5年のあいだに、子ども文庫、PTA母親文庫の開設につなげるボランティア養成を図るために、「もりや、子どもの本の会」を組織させ、読書環境不毛の守谷町で、地域、学校等で、少しずつ、基盤が形成されていった。やがて、こうした活動に携わった母親らが、「やはり、独立した図書館が必要だ。」と多くの人々に声を掛け、「もりやに“よい図書館を”の会」を発足した。助言者は、今は亡き日本親子読書センター代表の斎藤尚吾先生で、メンバーには、議員数名が加わったことで、当時の町長から、政治的な団体と誤解を招いたこともあった。コミュニティーが未成熟なまちにあって、学習ボランティア活動が、政治に利用されることが、残念に感じた時期もあったが、私や会員の大半が、日頃、純粹に、読書活動の普及に努めたこと、継続的な機関紙「風」の発行、自主的な先進図書館見学会、専門家を招いての各種学習会をとおした活動が、行政も含め、多方面で受け入れられるようになり、平成7年の守谷中央図書館開館に際し、大きな原動力となった。

この活動は、現在、「図書館と歩む会」と改称し、会員約190名で、続けられており、文字どおり、図書館の発展と共に、図書館行事への参加、専門家を招いての学習会の開催など、市民と共に、より良き図書館活動を追求して、やまない人々によって、永遠に支えら

れ、継続していくことであろう。

私は、この活動をとおして、社会教育の本質は、本来、学んだことを地域を創る力に転化させていくことにならなければ、行政も、地域をも理解させることにつながらないことを痛感し、また、実証させることも出来ないことを苦しみながら、思い知ったのである。当時は、「アイデア、モニター」制度しか、住民参加制度がなく、住民の自主学習活動に対する偏見が根強くあり、同僚たちの圧力に耐えられなくなり、ヤケ酒をあおったり、辛い思いをしたこともあった。あれから10年近く経た今、思うことは、市民と協働で実践するまちづくりを進めるためにも、市民と行政がお互いの持っている情報を共有し、市の状況（行財政事情も含む。）について、よく知っていただくことが重要であり、また、少しでも、市民参画型システムを創出していかなければならないということである。

どうしたら、市民参画を促し、地域の人々が、地域の公民館や図書館を積極的に活用し、生きがいを見い出せるかが、生涯学習のまちづくりにつながっていくものと私自身は、確信しているが、まだまだ、課題は多い。

昨年からの学校5日制に伴い、子どもたちは、土、日曜日、大勢で、公民館にやって来るかと思いきや、対策事業を試みたら、たった親子3組しか集まらなかったこともあった。近くの小学校で実施した学校5日制に関するアンケートによると、「親子で、子供会地域行事、公民館行事に参加したい。」の項目が最下位だそう。もっとも、理由は定かでないが、公民館行事に、人が集まらなくなってきたのは、大人も含めてであるが、厳しい現実には、私は、ショックを隠し切れなかった。文部科学省が、青少年の社会奉仕体験の機会づくりを公民館に求められているらしいが、どうしていいやら…。お年寄りも含め、創年層、ひいては、定年退職した人々の、地域に入っていくための施策づくりも手づかずである。その他仕事以外で、感じる課題は数知れずある。

“守谷”は、利根、鬼怒、小貝の三大河川に囲まれた水と緑に恵まれた自然豊かな地域であったが、この三十年来の住宅団地や道路等の開発から、自然環境に、変化が生じてきたことは否めないが、私は、近年、里山整備等の自然を回帰しようとする活動に携ってきた。

そうしたとき、いつも、心に痛んできたのは、「人」のモラル、道德観の問題である。かつて、里山であったところや雑木林、河川敷、高速道路の側道には、どこも、粗大ゴミを含めたゴミが散乱している。いつも、ボランティア活動は、必ずと云っていいほど、ゴミ回収から始まる。一見、成長著しいまちであるが、陰では、「水と緑とゴミのまち“守谷”」と云っている輩もいるのである。市内の主要道路沿いは、常磐自動車道の谷和原インターチェンジから近いせいか、長距離トラック運転手にとって、真夜中の「守谷」は、仮眠休憩をする場所として、最適なのである。そして、長距離トラックが休憩し、走り去った後は、弁当など飲食ゴミが投げ捨てられていることが多い。私は、以前、自転車に乗り、午前4時半ごろから、道路沿いの空き缶拾いをやっていたことがあるので、間違いない。

こうした何気ない環境を破壊する行為に対して、私は、在来の人よりも、外からやってきた人々の心ない行為である以上に、その精神性を疑いたくなるような強い憤りを覚えるのである。

毎夏になると、広い開放感のある中央公民館では、タバコを吸ったり、床に寝ころんで平気である中・高校生を多く見掛け、よく注意したものだが、その比ではない。

また、守谷市の花「山百合」も、かつては、多く見られたが、市内の群生地から、根こそぎ、持ち去ってしまうのも、外からの人々に依るところが多いことも多数、耳にしている。

そこで、私は、昨年より、市の花のシンボル“山百合”をよみがえらせることが出来ないか、それを創年層の生きがい対策として、活かすことが出来ないかを模索してきた。

最初は、「山百合」の花を知ってはいたものの、どのような特性があるものなのかも知らなかった私であったが、愛好者、近隣の話やインターネットのホームページ等で知るにつれ、ますます、「山百合」が好きになっていった。

今年7月に、県内の玉造町、霞ヶ浦町を会場として行なわれた第45回全国自然公園大会の自然観察コースにもなった玉造町「井上山百合の里」は、民地の山林（約6,000㎡）を活かした里山保全の一環として、「山百合」栽培に取り組んで来られた素晴らしい「山百合」の楽園である。

私は、昨年、この地を新聞で知り、何度となく、足を運び、茨城県内に、こんな素晴らしいところがあったのかと驚いた。近くにあるお寺から、木道が整備され、正面に至るのだが、小鳥がさえずり、虫の鳴き声が聞こえ、山林に入ると、ホタルブクロや珍しい植物、山野草を見ることが出来る。聞くと、種の保存も含め、30年近くも、手入れを加えて来られたそうだ。7月中旬ともなると、見渡すかぎり、「山百合」が咲き誇っている…。

このような「山百合の里」が、「守谷」にあれば、どれだけの人々の気持ちを癒せるのではないかと、いつも、帰る途中で考えたものだが、その「夢」も、いよいよ、現実のものとして、行動に移すことが出来たのである。

この11月18日（火）に、この玉造町「井上山百合の里」を運営する関野謙一代表外2名を講師に招き、私の担当する高野公民館を会場に、「山ゆりの育て方講習会」と併せ、会田守谷市長にも参加をいただき、市の花「山百合」の普及を目的とした「守谷山百合の会」を発足させることが出来たのである。

「山ゆりの育て方講習会」は、別紙資料にあるように、参加者36名が、3名の講師の指導のもと、栽培方法、球根の植え付け方法を学び、各自が、公民館敷地内に、1人2個の球根を番号順に、1ヶ所ずつ植え、各自の自分の名札（立て札）を立て、里親として、管理、運営を参加者全員を「守谷山百合の会」会員とみなすことによって、委ねるものである。もし、「山百合」の球根が盗掘されたとしても、公民館側では、責任を負わなくても良いこととし、会全体の責任であることも、講習会の席上、参加者全員に、確認をした。

今後は、「山百合」の咲く公民館として、位置付け、市民にも公表し、市民相互が交流を深める催しが出来よう、発展させていきたいと考えており、さらには、市全体を対象として、協力者を拡大し、少なくなった「山百合」の群生地を増やしていければ、必ず、「山百合」もよみがえってくるであろう。そして、玉造町「井上山百合の里」を始めとして「山百合」をとおした市町村交流を深めるために、来年は、栃木県益子町で開催される「全国山ゆりサミット」に参加し、守谷市の花「山百合」をアピールしたいと考えている。

また、10月11日（土）に、同じく高野公民館で行なわれた茨城大学助教授の長谷川幸介先生をお迎えしての講演会「人にやさしいまちづくり～地域のなかでのあなたの役割は？」のなかで、先生は、「地域のなかで、何かしようとするとき、例えば、「地域のおじいちゃん、おばあちゃんたちのために、何をしてあげられるかと考えるのではなく、どう

やって、その人たちに、「役」を演じてもらえるか。その人たちの持っている力を借りることが出来るかという風に考えるのが正しい。」とおっしゃっていましたが、この言葉に、大いに、ヒントをいただき、早速、この「山ゆりの育て方講習会」に活用させていただいた。

例えば、講習会開催日の2週間位前に、半日の日程で、「守谷山百合の会」結成に至らしめるためには、リーダーを含めた協力者探しと事前作業が必要だと考え、参加予定者の中から、リーダー候補者選びをしていたときのことである。偶然にも、参加申込締切後、ぜひ、参加させてほしいという人が現われたので、参加条件として、結成予定の「山百合の会」のリーダーになってほしいと頼んでみると、快く、引き受けてくれたのだった。この人は、面識はあったが、「凧」づくりの達人であり、しかも、園芸が趣味である。ここ数年、苦勞しっ放しの私であったが、ようやく、“運”が向いてきたと思い、嬉しくなってきた。球根の植え付け予定地を一緒に見て廻ると、ホール下の日当たりの良い所で、「ここに植えるのが最適だけれど、花が咲いたとき、さも盗んで下さいと云わんばかりの場所だよ。」とのアドバイスに従い、半日陰の栽培条件の良い場所と植栽の移動を決め、5日後の事前の土の掘り起こし作業に参加予定者名簿からリストアップ依頼した人を含めた7名の人たちと共に実行した。その人たちからは、色々な知恵や“力”を発揮していただき、講習会当日も、「大和田さんは、何をしなくてもいいよ。」とまで云われ、受付、駐車場係等協力をいただき、当方の予想を上回る働きぶりに、事業は、大成功した。10日後の「守谷山百合の会」総会において、7人全員が役員となり、今後の運営の中心メンバーとなったことによって、大いに、“役”を演じていただきたいと、私は、期待している。

必ずや、きっと、この7名を中心とした30数名の方々が、私が考える以上に、「山百合」を媒介として、「人」のモラルを変え、気高い「山百合」の香りただようまちづくり運動につなげていってくれるであろうことを……。

私が云うまでもなく、今、社会は、「モノ」が溢れ、心の豊かさを実感出来ず、デフレ不況からやや明るい兆しが見え始めてはいるが、人々の心がすさみ、少年凶悪犯罪や予想だにせぬような事件が続発し、将来への先行き不透明さを如実に著している。

そのようなとき、そうした社会に不安を抱える人々の抑圧から解放出来る、人々の気持ちがホッとする場、癒しの場、先に紹介した玉造町「井上山百合の里」のようなオアシス（楽園）の場づくりが、生きにくい現代コミュニティー社会において、拡大されることを私は願ってやまないのである。

また、それが、変わりつつある“守谷”の生涯学習とコミュニティーづくりにおける最も大きなテーマとなるのではないだろうか。

このほど、私の担当する高野公民館において、任意団体であるが、公民館側の呼びかけにより、高野地域在住の有志10数名が集まり、「高野地区まちづくりの会」が発足した。集まった人からは、「区長同士でもつながりがなく、都心へ通う人が多く、多忙で飲む機会もない。」「町内会において、周りの人たちが、コミュニティー感覚が乏しく、非常に寂しい。」との現状を憂える声が聞かれ、コミュニティーづくりの必要性を痛感し、私も、司会をしながら、何とかしていきたいと思った。

3回目の活動として行なわれた12月5日（金）の茨城大学助教授の長谷川幸介先生の講話「地域づくりとコミュニティー」及びワークショップには、前回より、多くの参加者が

あった。ワークショップでは、「高野地域の悪いところ」を考え合うKJ法をとおした共同作業によって、地域の抱える課題が、整理、明確化されたことによって、自分たちが、良くしていかなければという新しい「気づき」が生じ、参加者の気持ちが一様になってきたところである。

私は、この「高野地区まちづくりの会」が、順調に発展していくことによって、地域のコミュニティーづくりの中核を荷い、地域の公園で、「お祭り」等イベント、環境美化活動（利根川左岸の環境保全活動、花いっぱい運動）の開催や、定年退職した人が、地域に入っていけるような場づくりをとおして、地域の人々の多様な参加、交流型社会を創出してほしいと願っている。

そのために、今後は、設立された区長会連絡会高野支部との連携を視野に入れ、会員各自が企画力を高め、地域をデザインする創造性を兼ね備えていけるように、共に、学んでいきたい。

また、地域内には、アパート、マンションも多くなり、「隣りの人は、何する者ぞ。」というコミュニティー感覚があったとしても、人々は、つながりを断とうとしているのではないが故、他のまちにないような事業（場づくり）が、十分可能だと思われる。また、その可能性に期待したい。

現在、守谷市内では多くの人々の念願であったつくばエクスプレスの開業まで、あと2年と迫り、至るところで、工事が急ピッチで進められており、いよいよ、長年の「夢」が実現されようとしている。

平成17年秋には、「森の中の駅」をイメージした駅前広場が出来、都心と約35分で結ばれることになるのである。私の家の真後ろに、電車が走る。新駅へも歩いて5分である。視力が悪く、乗用車の運転免許の持てない私にとって、東京、千葉へ行くには、電車が便利で、つくばエクスプレスの開業を都内へ通う多くの人が待ち焦れる気持ちがよく分かる。

これからの私達行政職員は、希望の持てる、魅力のあるまちとするためには、地域住民に対し、つくばエクスプレスのように「夢」を運び、演出する「夢先案内人」としての役割を果たしていかなければならないのではないだろうか。

そのためには、まず、「自分」をつくり、自分から、積極的に、地域の人々と交わりながら、「市民との協働」を図り、その人でなければ出来ない「まちづくり」が出来る人を見つけ、人に、「夢」や「希望」を与え、人を元気にさせる「人」を時間をかけ、創っていくに、他ならないのである。

守谷市は、まだまだ、人口が増え、成長を続ける可能性を持ったまちで、県下でも、居住者の平均年齢の若々しいまちである。混在した地域資源（人、モノ、自然）を如何にして、高め、若い世代の人々が、地域のことに関心を持ち、誇りを持てるようなまちになれば、必ずや、「守谷」大好き人間が多くなり、「人」のモラルや意識も大きく変わり、犯罪も少なくなっていくのではないかと思う。

そのためにも、今後の公民館活動においては、市民が参加しやすい環境を整え、「守谷」に関する情報を提供し、「人」と「人」の繋がりを重視した「地域」づくりを図るために、好きなこと（活動）で社会貢献出来るボランティア養成講座を開設するなど、創造性に富んだ施策を講じていく必要がある。

また、「まち」が好きになっていく、学習することが好きな人たちの活動を支援してい

かなければならないのである。

そして、そのような学習基盤を確立することによって、出来るならば、わざわざ、遠くまで、出掛けなくても、自然が満喫出来る“人、まち、自然”が輝くまちにしていきたいと思うのである。

都心から、約 35 分のまちで、「山百合」が見られ、1 日自然体験出来るような、“今、守谷が面白い”と云われるまちに……。

私にとっては、そのような「守谷大好き人間」の人たちと共に、「学びが先行する社会」、「参加、交流型社会」を創出していくことが、ささやかなる“夢”であり、また、実現したいと思うのである。

平成十五年十一月十九日（水）

東京新聞茨城版

ヤマユリの里よみがえれ

開発や里山の荒廃で激減した守谷市の市花・ヤマユリをよみがえらせようと十八日、市教委の呼びかけで市民有志が「守谷山百合の会」（榎本勝男会長）を結成した。同会は、里山保全でヤマユリ栽培に取り組む玉造町の「井上山百合の会」（関野謙一代表）の指導を受けて活動を始めた。（坂入 基之）

守谷市の花

同市内ではかつて、市花に危機感を抱いた市教委が指定されるほどヤマユリが咲いていた。だが、薪が使われなくなり、里山の手入れがおろそかになり、宅地化が進んだ十数年、前からの姿を消し、今では見かけることも少なくなつた。一年半前、姿を消す市

市民らが会を結成

一市長をはじめ市民三千六人が参加。玉造町からこの後、同代表らが植木



庭でヤマユリの球根を植える参加者たち＝守谷市で

『盗掘にめげず』栽培地拡大

ヤマユリの球根は高値で取引され、自生地での盗掘も絶えない。結成式でも栽培地公表をめぐり議論が交わされたが、「ヤマユリを取り戻すには、市民の理解と協力が不可欠。盗掘されてもめげず運動の輪を広げたい」と公表に踏み切った。

参加した主婦岡部響美さんは「人工的に増やさなければ減るばかり。自分たちの手で育てなければ……」と目を輝かせていた。会田市長も「活動の輪を広げヤマユリの香り漂う街にしてほしい」と期待を寄せた。

同会は高野公民館を「ヤマユリの咲く公民館」と位置づけ、写真撮影会など市民交流の場として発展させながら、市内各地に栽培地を拡大していく方針だ。